

## 120824 セミヤドリガ

スギやヒノキの人工林内を歩くと、足元から「ヒグラシ」が飛び立ちます。

中には、地面付近の草むらからの脱出に手間取り、羽をバタつかせながらもがいている個体も見られます。

そして、飛び立った個体は、すぐ近くの本の幹や枝葉にとまることが多いです。

低いところにとまった個体は、絶好の“被写体”になりますので、音を立てずに近づいてみると…

**セミの体に何かがかっついているではありませんか…！！**

カイコの“まゆ”を半分に切ったような形の白い何かが、透明の羽を通して見えるのです…

最初は、少し気味悪いながらも非常に珍しいものを見つけた、と思っていたのですが、注意して観察すると、白いものだけではなく、もう少し小さな茶色っぽいものを付けている個体も見つけることができ、“珍しい”というほど少ない訳ではないことに気づきました。

このセミの体に付着する謎の物体について調べてみると、「**セミヤドリガ**」の幼虫だということがわかりました。

セミの成虫に“外部寄生”して、体液を吸って成長する種で、ヒグラシ、ミンミンゼミ、アブラゼミ、ツクツクボウシなどの腹部に付着するようです。

なかでも「**ヒグラシの雌**」に寄生するケースが圧倒的に多いということです。

ご存じのとおり、セミの成虫に寄生しても、宿主（セミ成虫）の寿命は1週間ほどですので、短時間に急成長しなければなりません。

- 孵化した1齢幼虫： 全長0.7mm程度、セミの胸や腹部の節の隙間等に入り込み、体液を吸う
- 2～4齢幼虫： 太ったイモムシのような体つきで、体色は薄い赤褐色。  
セミの腹部背面に張り上げた足場系につかまって体液を吸う
- 5齢（終齢）幼虫： 純白の蠟状物質でできた綿毛で背中が覆われており、寄生されたセミは遠くからでも目立つようになる。
- 5齢まで急速に成長した後、宿主のセミが死ぬ直前にその体から離れ、樹幹や葉上で白いまゆをつくり、2週間ほどで羽化するそうです。

「**セミヤドリガ**」の成虫は羽を広げても2cm程度の小さなガで、口はほとんど退化していることから、食事をとることもなく産卵してほんの数日以内に死んでしまうようです。

このような短時間で、無事に雄と雌が出会えるのか心配ですが、実際は確認される成虫のほとんど全てが雌で、交尾せずに産卵（単為生殖）するようです。

さて、寄生されたセミの側はたまったものではないでしょう…

相手は幼虫と言えども相対的にかなり大きいですので、羽をうまく閉じることができなかつたり、数匹の幼虫に寄生され、その重みで飛び立つのが遅れたり飛翔速度も遅くなったり…

さらに、終齢幼虫は真っ白な大福餅のように太っており、よく目立つために外敵に襲われる危険も高まるでしょう。

幸い、寄生されることでセミが死んだり産卵できない、ということはあまりないようです。

- ◆写真①：「ヒグラシ」の雌。 2～4 齢幼虫が3匹以上寄生しているようです。
- ◆写真②：「ヒグラシ」の雄。 大きな終齢幼虫の寄生で羽が閉じきれないようです。
- ◆写真③：「ヒグラシ」の雌。 白い粉が残っており、終齢幼虫もいたようです。





